

優秀な教員を目指して、そして教員としての成長のために

教職支援センター

副センター長 岸 本 芳 信

教育委員会制度をはじめ、子どもの学力問題、いじめ問題、教員の資質向上、道徳教育、外国語教育…と、多方面にわたる教育問題の報道が世の中を賑わせている。最近では、道徳と英語の教科化を含む学習指導要領の改訂、教員免許の改革などが話題となっている。昨年度の本誌では、流行語大賞をキーワードとして、今後予想される多くの教育課題に対応できる教員となるための基礎的な内容を想定しながら、これからの教員の在り方について考えてみた。本稿では、最近の教員の資質やキャリア教育等について考えてみたい。

(1) 未来の教育の姿

本来、人間は“よりよい生活”を求めて活動をしてきた。世界では、古代人の文明の進化、産業革命等を経ながら、生活の向上を求めて技術を進歩させてきた。明治以来の日本では、世界に“追いつけ、追い越せ”を目標に、技術の進歩、生活の向上を目指して取り組んできた。当時は、欧米という目標があったため、その目標に向けて技術の向上に取り組んできたが、最近では、日本の技術は世界一のレベルとなってきており、自ら目標を設定する必要がでてきた。

教育面から見れば、欧米の技術を参考に大量生産により“生活の向上”を目指してきた時代は、全体的な教育が必要であり、一斉授業や競争授業等で、技術の進歩に対応する人間を大量にしかも均一に育てる必要があったと思われる。そのために、個性よりも均斉が重視され、集団での教育が重視されてきたのでしょ。しかし、現在は日本の技術力は世界の頂点にあり、2008年の教育課程改訂の背景に見られるように、“知識基盤社会”における教育の在り方を目指す必要が出てきた。また、“知識の活用能力”と言われて日が続いているが、なかなか良い方法が見つからず、悪戦苦闘しているのが現状でしょう。もちろん、人間の改革能力は限られてはおり、教師の対応力も瞬時には反応しないのが現状であろうが、模索が続けられている。

現在、各方面から、これからの時代に対応するための能力観や学力観として、多くのキーワードが出てきている。まず、日本の政府から、文部科学省では「生きる力」「学士力」、経済産業省では「社会人基礎力」、内閣府では「人間力」が、また、OECDでは「キー・コンピテンシー」という言葉も出てきている。内容については、紙面の都合で割愛するが、是非その内容についてそれぞれで検討してみたい。

いま教師の大量採用が続いており、新しい教員は、思い切った改革の為、その全能力をぶつけてほしい。そのためには、現在の世界をよく見極め、柔軟な考え方を磨き上げ、子どもの未来を見据えた教育者になってほしい。そこで、他の書物を参考に、いくつかの方向性を考えてみたい。

(2) キャリア教育について

今後の教育の方向としては、2011年1月答申の『中央教育審議会』では、基本的方向性として「キャリア教育」、「職業教育」、「生涯学習の観点に立ったキャリア支援教育」をあげ、その充実方策を述べ

ている。2015年1月の『日本教育新聞社説』では、未来の教育の姿として、「より良い社会を築くことに参画する社会人の育成」、「そのために、説明力、交渉力、調整力、説得力の向上のためのアクティブな授業展開」等を提唱している。

これらから考えられるのは、待ったなしの授業改革、授業力の向上である。幸い、本学では“自立心、対話力、創造性”が、学生に習得させる基本姿勢として定着してきている。免許取得に際しては、現在の教育の眼を、30年後、50年後に想いをはせ、その時代に生きる人間の教育だというキャリア教育の視点をもってほしい。また、根本に“教育的人間力”をもって、自らの使命感、実践力、対応力を育て、向上させて、これからの時代や世界に通用する教員になってほしいと願っている。

(3) これからの教育に求められる「教師力」

ここで、今後求められる“教師力”について、諸富祥彦著「教師の資質」（朝日新聞出版社 2014年）を参考にしながら考えてみたいと思う。諸富氏はこの本で、教師を取り巻く現状、学校での子ども達の現状、担任教師に求められる学級経営力、教師としての使命、これからの教師の資質などについて述べている。その中で、小・中・高でのキャリア教育で育てたい内容として、「出会いに生き方を学ぶ教育」「夢見る力」「自分を見つめ選択する力」「コミュニケーション能力」「達成する力」「七転び八起き力」「社会貢献を喜べる力」を育成し、「総合的な人間力」を伸ばせと書いている。また、教師の資質として、①使命感と情熱、②情緒の安定、③打たれ強さ、④人間関係のプロ、⑤最後まで聞くという最低のルール、⑥リレーションを作る、⑦口が堅い、話しやすい、守ってくれるの三条件を、⑧子どもと援助希求しやすい関係を、⑨自己肯定感を持ち、子どもの自己肯定感を高める力、⑩チーム支援力、⑪子どもをよく観察し、保護者との積極的な連絡ができる、⑫授業構成力、⑬キャリア形成の視点、⑭教員以外の外の世界とのつながり、⑮答えなき問いを考え抜く、⑯メンタルヘルスのセルフケア力、⑰問題を一人で抱え込まない、⑱他の教師と支えあえる関係づくりを挙げている（各項目を岸本が勝手に短い言葉で表した）。さらに、最も重要な資質として、「子どもに何度裏切られても、決して切らない、見捨てない姿勢で関わり続けること」と述べている。

特に最後の「関わり続けること」は、私も教員人生において、常に心掛け、また、後輩にも勧めてきたことであり、是非、本学の皆さんにも推奨したいことである。このことが、子どもとの信頼関係、人間関係を強いものにしていくことであり、その先の保護者との関係も良好なものにしていくと考える。さらに、これからは、地域、家庭、学校が一体となって子育てをすることが重要であり、教師としても、この三者の関係を大切に、良好に保ちたいものである。そのためには、日常生活で目の前の人に心をこめた対応を心がけたい。テレビのCMでよく見た光景であるが、人を助けたいという気持ちを持つだけでなく態度で示すことが求められていた。この思いやりの心は、保護者や地域の人、教員との関係においてもよい作用をもたらしてくれるはずである。しかし、そう対応するには、自分自身の心の状態も重要な要素と思われる。常に、自らの心を安定させて、人を思いやる心、人を大切にす心、さらに、その心を態度で表す行動力が必要でしょう。日ごろから、素直な気持ちを相手に伝えるよう訓練しておきたい。

(4) まとめ

さて、ここまでは、「未来の教育」「キャリア教育」「教師力」についてみてきたが、学生の皆さん

の目の前には、採用試験という問題をクリアする必要がある。そのことを少し考え、まとめにしたい。

2014年11月の「日本教育新聞」に、広島大の山崎氏が「教員採用の需要推計」という記事を書いている。それによれば、変動の要因として「児童・生徒数の増減、教員の年齢構成」が挙げられており、出生数は約30周年周期、教員退職者数は約38年周期で変動しており、この二つにより教員需要数も変動している。この様子から教員採用数は、小学校では2017年度にピークを迎え、2022年度から急減し、中学校では小学校から3年遅れと推計されている。また、小学校では、関東と近畿で減少に転じており、2021年頃から減少見込みであるが、その他は後しばらく微増である。中学校では、2019年から2022年にかけてピークを迎え、その後減少と推計されている。

さらに、全国での大学の教員養成コースの増加も見落としとしてはならない。これから採用試験を受ける学生の皆さんは、この変動や大学の教員養成コース卒業生数を意識し、有効な計画を立てて努力していくことが必要である。大学生活でのゆとりのある時間をいかに有効に使うかが、教員採用試験に合格するための、最初の課題である。皆さんには、大学生として当然の研究をはじめとして、ボランティア、アルバイト…と多くの事が待っている。しかも、現状を見ると、あまりゆっくりとした時間はない。まず、一般教養、教職教養、専門教科という学力の問題、次に、人物評価に対応するための面接、小論文、場面指導等の問題をクリアする必要がある。いずれも、合格の基準まで到達することは簡単ではない。つまり、今すぐにでも、採用試験に向けての学習のスタートが必要である。

そして、前半で述べた、これからの教師像をよく頭に入れて、常に課題意識を持ち、日常の社会的出来事に関心を持ち、自分なりに考える習慣をつけておくこと、そして、人間として成長を続けることが大切である。具体的には、普段からテレビや新聞のニュース等に気を配り、他の人の表現を良く見聞きするよう習慣付けたいものである。また、日頃から、自らの教育理念を確立し、教育に対する熱意を高める等、自己を磨いておくことが必要である。課題対応力や応用力、そして、人間関係力やメンタル力も少しずつ身につけるようにしてください。

普段から、採用試験に向けて、コミュニケーション力、授業力、実践的対応力等の力量を磨くよう生活するとともに、教育実習や学校ボランティア等で、いろいろな場面で、「自分だったら」という姿勢で取り組むことが役に立つでしょう。魅力ある教員となるために、そして教員として成長するために、自らの持てる力を十分に発揮すること、日々向上を目指して努力することを大切にして生活してください。

晴れて採用試験を突破し、優秀な教員として、さらに成長を続けられるよう願うものである。

履修履歴（自己評価）を活用した「教職実践演習」の取り組み

教職支援センター

特任准教授 大森 俊 昭

1 はじめに

「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令（平成20年文部科学省令第34号）により、平成22年度以降の新入生の教職課程の「教職に関する科目」として「教職実践演習」が新設された。この科目は、教職課程を履修する者が、「教科に関する科目」及び「教職に関する科目」の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものである。

指導内容としては、教員として求められる①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項の4つの事項を含めることが示されている。また、授業方法については、「学生のこれまでの教職課程の履修履歴を把握し、それを踏まえた指導を行うことにより、不足している知識や技能等を補うものとする」とされており、教育実習を経験した4回生に対して教職課程の仕上げとして、また教員に向けての最終準備として、学校現場に即した実践的な学修が必要となっている。

本学でも平成25年度の4回生から、教職課程最後の科目として4回生後期に実施している。初めての科目でもあり、答申の授業例や先進事例を参考に、教育委員会や学校現場の協力を得ながらより実践的な内容になるよう工夫して取り組んでいる。本稿では、この科目の趣旨を踏まえ、これまで学生が自ら行ってきた教職課程の履修履歴（自己評価）を活用して、自らの課題を明確にしながらい欲的に履修できるようにしたその取り組みについて述べる。

2 教職実践演習のシラバス

平成25年度に実施した教職実践演習のシラバスは、右表の通りである。答申に挙げられた①～④の事項を参考に、これまでの学修の中で不十分だと思われる実践的な内容を設定した。教職の意義と役割についての再確認、学校園の安全、特別支援についての理解、不登校・問題行動への対応、保護者への対応などの内容を入れるとともに、学校園現場が今抱える問題や課題などについて、教育委員会指導主事や現場の校長の講演、学校園見学などで具体的に学べるようにした。

講義は、小学校、幼稚園のそれぞれの実態に即して理解できるよう校種別に行うとともに、グループ討議、ロールプレイなど

授業コード	S60220	科目名称	教職実践演習（幼・小）
サブタイトル	実践力のある教師を目指して		
担当教員			
開講学期	2014年度 後期 単位数 2		
到達目標	授業（保育）実践力や児童（幼児）理解力、心構え等、教員としての職務に必要な資質・能力を整理して、自分にとって何が課題であるかを自覚する。そして、不足している知識や技能を補い、その定着を図り、教員生活を円滑にスタートできるようになる。		
授業概要	学校園見学や現場教師・指導主事等の講義などを通して、学校園現場の実情を学び、実務に当たっての心構えを学ぶ。また、指導計画の立案や模擬授業（保育）、事例研究などについて、グループ学習や討議を行い、実践力の育成を図る。また、これらの学習活動を通して、教員としての自己の課題を自覚するとともに、必要な知識・技能の定着を図る。		
準備学修	教職に向けての仕上げであることを意識して、専門科目、学級経営、指導技術等、これまでの学修内容を復習しておく。講義前には、学校園現場での指導を意識して、課題を持って講義に臨むようにすること。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション（講義の趣旨及び計画） 2. 教職の意義と教員の役割（講演）【指導主事等】 3. 教職の意義と教員の役割、学校園見学の目標と視点（グループ討議） 4. 学校園見学及び現場での指導（学校園経営と担任の役割）【小学校・幼稚園見学】 5. 学校園見学及び現場での指導（学校園経営と担任の役割）【小学校・幼稚園見学】 6. 学校園現場の現状と課題（グループ討議） 7. 環境構成と安全管理（事故例とその対応） 8. 社会人としての基本の習得（講義とロールプレイ） 9. 保護者や地域との連携（講義とロールプレイ） 10. 学校園現場における実態と課題の研究（講演）【小学校長・幼稚園長】 11. 学校園現場における特別支援教育の実践（講義、グループ討議） 12. 問題行動への対応、幼児理解の方法 13. 学習指導の基礎技術、場面に応じた援助の方法と実践（講義、実習） 14. 模擬授業の実践、保育改善の方法と実際 15. 教職実践演習のまとめ、教職に向けての決意（発表） <p>※ 講義の一部は、小学校、幼稚園に分けて行う。</p>		
評価方法	授業内容の理解、ワークシート（50%）、授業への取組姿勢（50%）		
教科書	適宜プリント等を配布		
参考書	これまで教職、教科に関する科目で使用してきたテキスト		

も取り入れた。特に、第1回目の講義では、オリエンテーションとして講座の趣旨の周知を図ると同時に、14回の学修に学生が自らの課題を明確に持って取り組めるよう、4年間の教職課程の履修履歴を振り返らせることにした。

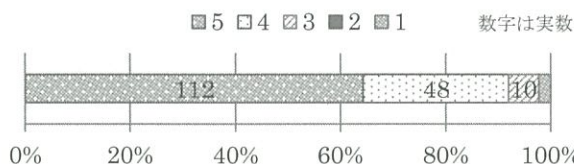
3 履修履歴の振り返り

右表は、本学が教職課程を履修する学生に、年度毎に履修状況を振り返らせている自己評価の観点である。1回生から各年度終了後に1年間の教職課程の取組状況を振り返らせ、自己評価させている。4回生のみ前期終了後に記録させている。評価方法は大学KISSシステムのWeb画面で行い、学修の理解度等を「5:できている」～「1:できていない」の5段階で評価することとしている。

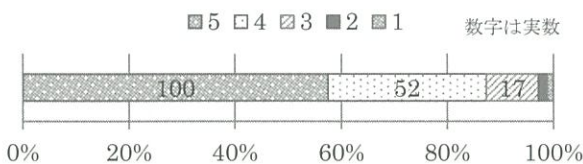
以下に、平成25年度教育学科4回生のうち履修履歴の提出のあった174名について集計したもののから、本学学生の特徴や課題と考えられる項目の状況を掲載する。

設問No	タイトル	質問内容
1		教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。
2	【学校教育についての理解】	教育の理念、教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を習得していますか。
3		学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。
4		子ども理解のために必要な心理・発達論の基礎知識を習得していますか。
5	【子どもについての理解】	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得していますか。
6		いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。
7		他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができますか。
8	【他者との協力】	保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか。
9		他者と共同して授業を企画・運営・展開することができますか。
10		集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。
11	【コミュニケーション】	集団において、率先して自らの役割を見つたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。
12		子どもたちの発達段階を考慮して、適切に接することができますか。
13		気軽に子どもと顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができますか。
14	【コミュニケーション】	子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができますか。
15		挨拶、言葉遣い、服装、他人への接し方など、社会人としての基本的な事項についていますか。
16		これまで履修した幼・小・中・高・栄養教諭の教育分野の科目の内容について理解していますか。
17	【教科・教育課程に関する基礎知識・技能】	教科書や学習指導要領の内容を理解していますか。
18		教育課程の編成に関する基礎理論・知識を習得していますか。
19		道徳教育・特別活動の指導法や内容に関する基礎理論・知識を習得していますか。
20		「総合的な学習の時間」の指導法や内容に関する基礎理論・知識を習得していますか。
21		情報教育機器の活用に係る基礎理論・知識を習得していますか。
22		学習指導法に係る基礎理論・知識を習得していますか。
23	【教育実践】	教材を分析することができますか。
24		教材研究を生かした各教科の授業を構想し、子どもの反応を想定した指導案としてまとめることができますか。
25		教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができますか。
26		子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができますか。
27		板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けていますか。
28		学級経営案を作成することができますか。
29	【課題探求】	自己の課題を認識し、その解決にむけて、学び続ける姿勢を持っていますか。
30		いじめ、不登校、特別支援教育などの学校教育に関する新たな課題に関心をもち、自分なりに意見を持つことができますか。

⑦他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができますか。



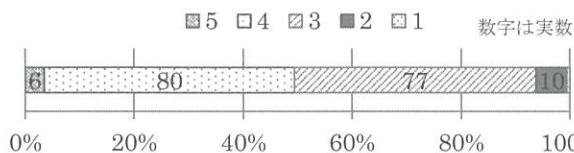
⑩集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。



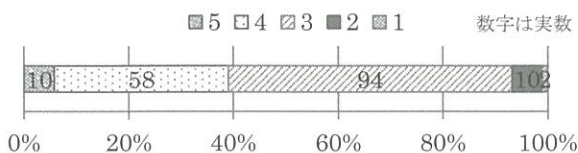
これらの項目では、5、4の評価が85%以上を占めており、普段から自らの長所として、「素直さ」「真面目さ」「協調性」「他者との協力」等を挙げる本学の学生の特徴が良く出ている。

一方、次の項目では、5が少なく、4と3に集中していることから、基礎理論や知識の習得、教材作成・学級経営案作成などについて、自信をもって「十分できている」と言えない状況がうかがえる。

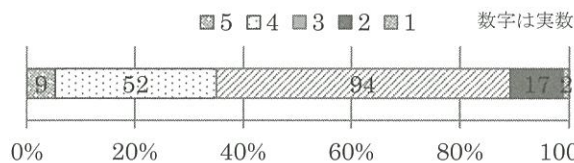
③学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。



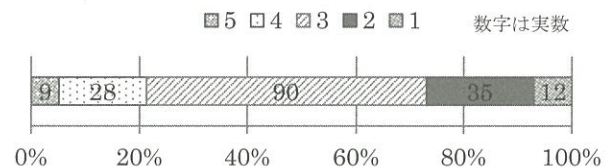
⑪情報教育機器の活用に係る基礎理論・知識を習得していますか。



㉔教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができますか。

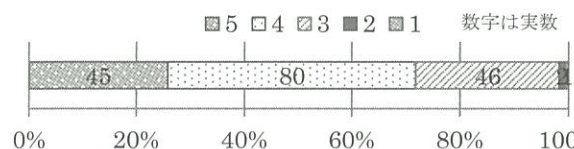


㉕学級経営案を作成することができますか。

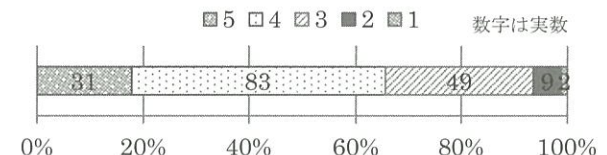


また、次の項目では、選択履修科目や興味・関心の違いによって、評価が5～3に分かれているように思われる。いじめ、不登校、特別支援教育などの課題や授業づくりは、学校教育の重要な領域であり、関心の薄い者には、学修の必要があることに気づかせたいと考える。

㉖いじめ、不登校、特別支援教育などの学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができますか。



㉗子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができますか。



以上のような課題がある学生達に、自己の課題に気づかせ、14回の学修に期待感を持ち意欲的に取り組ませるためには、各自が自分の履修履歴（自己評価）をしっかりと見て分析する必要があると考えた。また、同じ目標を持った仲間と意見交換することによって、より一層課題への取組が明確になると考え、第1回目のオリエンテーションの際に、履修履歴（自己評価）を活用した授業を行った。

4 履修履歴を活用した授業例

(1)第1回講義 オリエンテーション（講座の趣旨及び計画）

(2)日 時 平成25年9月26日（木）5時限 16:20～17:50

- (3)講義内容
- ・ 講座の開設の趣旨の説明を聞く。
 - ・ 各自が自分の履修履歴を見て、身に付けたこと、不十分なことを振り返る。
 - ・ グループに分かれて意見交換を行う。
 - ・ グループの意見交換のまとめを発表し、自分たちの課題をまとめる。
 - ・ 学校見学や外部講師から学びたい課題を整理する。

(4)実施結果

① 1回生から4回生前期までの教職課程の履修履歴を見て、気づきや感想を書く。

私が自分で一番身についたと感じるのは、子どもとのコミュニケーション力です。この履修履歴だけを見ていると、1回生のころから「4」などと高得点をつけているが、今思うと、教育実習や自然学校、ボランティアなどを経て子どもとのコミュニケーション能力が本当の意味で身についたと感じる。1回生の頃は、まだまだ本当の教育現場を見ていなかったのが、甘かったなと思う。教員になって何年かすると、今している評価も甘かったと感じるのではないだろうか。

授業で習う基礎的な理論や教育の知識については、学年が上がるごとに上がってきている。しかし、様々な知識を身に付けていくにつれ、自分の未熟さに気が付き、子どもとの接し方などの評価は、2回生、3回生と下がってきている。スクサポや実習で様々な経験をし、現実を知ったからだと思う。今は、その経験が自分の力になっていると思う。自分を振り返る機会ができて良かった。

2回生から実習に行ったので、教育実践の実践力が4回生になるにつれて上がっている。子どもの反応を生かし、授業を展開する力や教材を分析する力がついてきた。また、子どもと親しみを持った態度で接し、受容的な態度で接することも、子どもと触れ合う機会が増えるにつれて身についたと思う。いじめや特別支援教育についての知識がまだ不十分だと感じる。

1回生から4回生までの履修履歴を見ると、自分の評価がぐんと上がっていった。1回生の頃は、この質問内容もピンとこないものもあったが、今はしっかり考えることができる。教育実習や教員採用試験を受けてきて教育の事を多く学んできた結果が、4年次の履修履歴に現れていると思う。

②グループに分かれてお互いの感想等の意見交換をする。

自分たちが身につけてきた資質や能力、まだまだ不足している知識や技能などを話し合わせた。グループで話し合わせると、全体として次のような振り返りができ、全体の課題も明確になってきた。課題が明確になったことにより、本科目に対する学習意欲も高まったように感じた。

【身につけたこと】

- ・子ども一人ひとりに合った関わり方
- ・他者との協力、コミュニケーション
- ・子ども理解や子どもの様子から授業や保育を展開する力

【不十分なこと】

- ・学級運営の力
- ・特別支援教育の理解
- ・教育課程に関する知識・技能

5 講義内容の概略

第2回目以降の講義内容は次の通りである。

2. 教職の意義と教員の役割（講演）【指導主事等】
3. 教職の意義と教員の役割、学校園見学の目標と視点（グループ討議）
- 4-5. 学校園見学及び現場での指導（学校園経営と担任の役割）【小学校・幼稚園見学】
6. 学校園現場の現状と課題（グループ討議）
7. 環境構成と安全管理（事故例とその対応）
8. 社会人としての基本の習得（講義とロールプレイ）
9. 保護者や地域との連携（講義とロールプレイ）
10. 学校園現場における実態と課題の研究（講演）【小学校長・幼稚園長】
11. 学校園現場における特別支援教育の実際（講義、グループ討議）
12. 問題行動への対応、幼児理解の方法
13. 学習指導の基礎技術、場面に応じた援助の方法と実践（講義、実習）
14. 模擬授業の実践、保育改善の方法と実際
15. 教職実践演習のまとめ、教職に向けての決意（発表）

それぞれの実践については、紙面の関係で本稿では割愛するが、校長先生の講演や学校園見学の感想の一部を掲載する。

〔校園長先生の講演の感想〕

現場でのお話がたくさん聞けてとてもよかったです。先生方の陰での取り組みは、私達の全く知らないことばかりでした。お話を聞く中で、教師という仕事は最後まであきらめない根気が必要だと思いました。保育に先生の個性が出るというお話が心に残っています。性格や好きな事で保育に個人差が出るのであれば、私の特技や長所を發揮して子どもが楽しめる保育をしたいと思いました。

春から教員として働いていくために大切な児童理解の観点やこれから期待される教員としての力などになることをたくさん聞けた。授業づくりや学級づくりなどまだまだ春までに学んでおくべきことがたくさんあると思った。カウンセリングなどについてももしっかり本を読んでみようと思った。

〔学校園見学の感想〕

採用試験を経てからの学校観察は、今までしてきたものと一味違ったような気がしました。春から学級担任だという気持ちで臨めたので、教師の発問、問の取り方、学年に合った子どもへの関わり方など実践的な事を吸収することができたと思います。今まで夢であった小学校教員が春からは自分の仕事になるようにしています。今回の気持ちを忘れることなく来年からやっていきたいと思っています。

実習も教員採用試験も終えて、もう半年もしないうちに自分も先生として現場に行くという状況の中、見た授業はとても新鮮で、また見る観点も以前よりは鋭くなった気がした。分かりやすい授業をする「授業力」もとても重大な学級経営の要素であり、また信頼関係も良い授業を展開させるための重大な要素であると思った。残りの大学生活をどう過ごすべきかははっきりした。

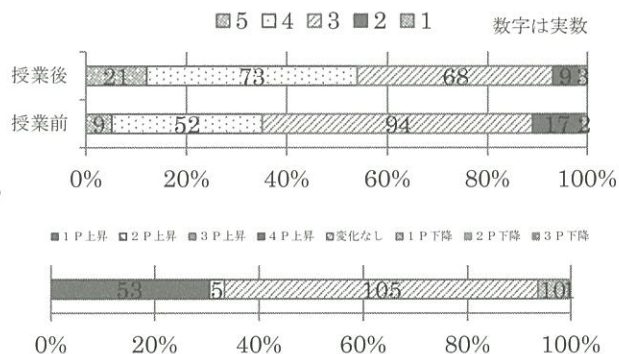
6 成果と課題

初めて実施した科目であることから、学生達の取り組み状況や課題に対する学びの成果を把握するため、講義終了時に、再度履修状況の自己評価を行わせた。そして、4回生前期終了後に記録した自己評価と比較することによって、本講座の成果及び課題を把握することにした。次にその一部を示す。なお、、3→4、4→5、2→4、3→5のように向上した者ばかりでなく、5→4、4→3、5→3、4→2のように評価を下げた者もあるが、授業前後の比較だけでは捉えられないため、変動の人数が分かるグラフも合わせて掲載した。

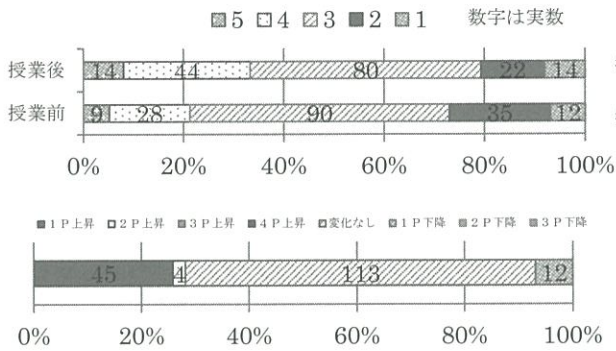
㉓学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。



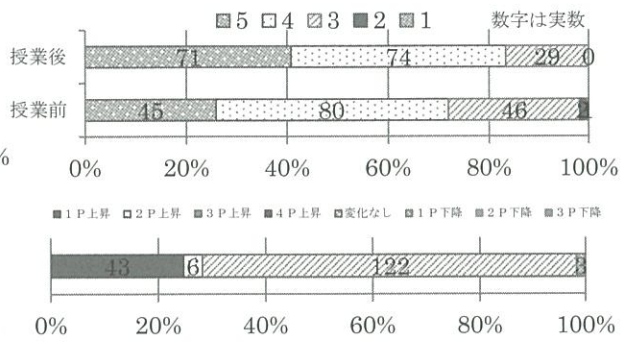
㉔教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができますか。



⑨学級経営案を作成することができますか。



⑩いじめ、不登校、特別支援教育などの学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができますか。



14回の学修を通して、自分たちの課題としていた内容について、自己評価で5、4が増えていることから、授業前に比べて理解が深まったと感じていることがうかがえる。基礎理論や教材開発、学級経営案などについては、実際の学校園見学や校園長の講演などから、具体的に理解できたことが大きかったと考えられる。また、いじめ、不登校、特別支援教育については、改めて講義を設けたことから、これまでこれらの講義を選択していなかったり課題意識を持っていなかったりした者が意識して学修したために、自己評価で5、4が大幅に増えたものと考えられる。

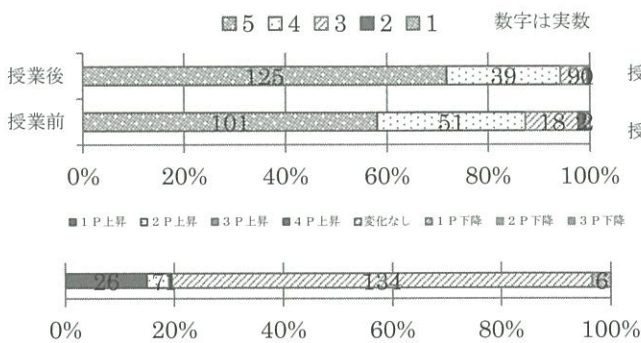
⑪集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。



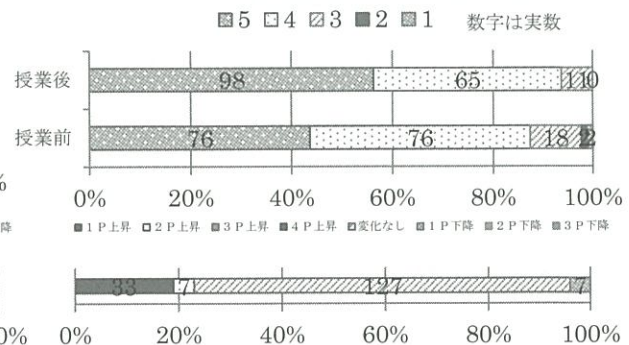
⑫集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。



⑬保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか。



⑭自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持っていますか。



授業前に評価の高かった責任感や協調性の項目についても、具体的な教育現場において自らの役割をイメージすることができたのか、5、4と評価する割合が一層高くなっている。保護者や地域との連携の重要性については、授業前から認識しているようだったが、その具体的な対応に不安を抱いている者が多かった。しかし、校園長の講演や保護者対応の講義を受け、いくらか不安も解消されたようで、授業後は95%近くの学生が5、4と評価している。自己の課題を認識しその解決に向けて学び続ける姿勢についても、履修履歴（自己評価）の活用による学修の効果があつたのか、5、4の割合が大きく増えている。

全体を通して、1～2ポイント上昇した者が多いが、中には1～2ポイント下降した者も数人ずついる。これは、学校園の現場を見学したり、校園長の話聴いたりする中で、これまでの自己評価が甘かったと感じているからだと思われる。学校園現場に勤める具体的なイメージができてきたからこそ、自分の現在の資質や技能を厳しく見るようになったと考えられる。

履修履歴の集計から得た本科目の成果は、学生のアンケートの次のような記述からもうかがえる。

「実際に現場の話聞き、これから数か月後のことをより具体的にイメージをつくることができた。」

「有名な先生の授業DVDは、自分の未熟さを痛感しながらも、自分もこんな授業ができるようになりたいという理想像ができた。」

「友達とディスカッションなどをすることで、視野や考え方が広がった。」

「将来について具体的に考える機会となり、モチベーションを高めることが出来たので良かった。」

「教員採用試験で失敗したが、周りには合格者が大勢いて毎日が不安でつらかった。この講義で学校観察や講演、模擬授業などが盛り込まれ、教師になりたいという情熱を取り戻すことが出来た。」

一方課題は、授業前後で変化の少なかった項目や次のような学生の意見から把握することができる。

「実践という授業なのに座学やグループでの話し合いが多く模擬授業等の活動が少なくて残念だった。」

「最初の授業に自分に何が足りないかというのを明らかにしたが、それを補う授業が少なかった。」

「自分の苦手な分野を選択できるような演習があれば、更に自己を高められるのではないかと思った。」

つまり、授業内容や学習活動の設定が、様々な課題をもつ個人に応じた実践的な内容になっていなかったことである。情報教育機器の活用など学生が課題と考えている内容に対して、担当する教員の専門分野の関係でその講義を設定できないなど、指導教員と学生の課題のマッチングが今後の大きな課題であるといえる。また、教員免許取得のみで教員にならない学生もかなり在籍しており、これらの学生の学修をどのようにしていくのかも今後の課題である。

最後に、本研究で活用した履修履歴（自己評価）については、学修状況をある程度把握するには有効であったが、「5：できている」～「1：できていない」のように評価基準が明確でないために、各人が自分の感覚で五段階評価しているところがある。また、評価項目についても、学校と幼稚園とではその質問内容を変える必要がある。学生が教職課程により意欲的に取り組めるようにするために、今後も履修履歴の改善を図るとともに、履修履歴を積極的に活用し、新科目の「教職実践演習」をさらに充実していかなければならない。

英語英米文学科での1回生からの取り組み

文学部 英語英米文学科
教授 八日市屋 多栄子

英語英米文学科に入学してきた学生は、一般企業・教職等が就職先であり、まず、社会人としての教養を身につけて卒業して欲しいと願っている。その為には1回生の入学当初から、私流の生活指導を行っている。例えば「遅刻」、「挨拶をしない」、「研究室へノックせずに入る」等、実に簡単な間違いを正す事から礼節を教えている。次に「バスや電車で年配の方に席を譲っているか」、「電車内で化粧をしていないか」、など、意見交換をしながら、子どものときから学んだ道徳を復習するようにしている。

英語英米文学科を第1志望で入学してきた学生ばかりではない。また、全員がはっきりとした目的を持って入学しているのでもない。しかし学科としてはしっかりと勉強して英語力をつけ、出来れば専門職に就く学生を増やしたいと願っている。学生全員には英検2級の合格を課しているのので、合格するまで受験し続けなければならない。早く合格すれば、就職に有利なTOEIC、将来の卒業後の留学に備えTOEFL等の高得点を目指せる。1回生で2級の合格者は言っていた。『英語は得意ではないと思っていただけ、合格出来て嬉しい』と、『これからも頑張っていきたい』と。もちろん2級合格後に入学した学生には準1級の受験指導を始めている。

次に、英語英米文学科2回生では1学期間ハワイ大学で外国の学生と同じクラスで勉強出来るプログラムがあるので、紹介する。これは本学科2回生のみプログラムのハワイ大学セメスター留学で、1回生の10月初旬が申し込み締め切りである。7月頃には保証人にも説明会を設けているが、この留学をしたくて当学科に入学してくる学生もいるし、あまり関心のない学生もいるので、授業では簡単な説明にしている。ハワイ大学へ留学中は神戸女子大学の授業料は3/4が免除となる。従ってハワイ大学の授業料からこの免除額を差し引いた額を払う事となる。現地では我大学のセミナーハウス滞在なのでこれは安価である。寮母さんが常駐し、学生は4人部屋で自炊の共同生活なので、セミナーハウスで学ぶ事も大変多い。最近の学生は内向き志向と言われているので、大いに海外へ出て欲しいと願っている。留学後帰国した次の学期にはTOEICが150点ほど上がった学生もいる。

3回生になると、必修のオーラルイングリッシュのクラスでスピーチコンテストが行われる。4人の英語のネイティブスピーカーの教員のそれぞれのクラスから代表者各2名が出場、計8名のコンテスト。聴衆は英語英米文学科の3回生全員、1回生全員、その他希望の学生も見学可能である。この授業を教えていない教員がジャッジを務めるが、甲乙つけがたい白熱戦となっている。パワーポイントを使ったプレゼンテーションでかなりの練習が必要である。3回生では自分が代表になれるように切磋琢磨し頑張っている。聴衆の反応も勘案して採点する。毎年良いスピーチが出来、すばらしいスピーカーが出てくる。

こういった英語のグッドスピーカーは、4回生になるとまた活躍の場がある。本学では、毎年5月に恒例のシェイクスピア劇団がロンドンから来日し、観劇会が催される。この時のウェルカムスピーチを日英両語で行う。地域住民も招待し、昨年は『ロミオとジュリエット』だったこともあり900人の観客

でにぎわった。学生にはスピーチ訓練の大変よい機会であった。1ヶ月近く前から練習を始めている。また幕間のアナウンスメントを日英両語で行っていて3・4回生の英語のうまい学生が選ばれる。体育文化ホールでの上演なので、学生は学内のいろんな場所に立ち、観客の接待等に忙しく働いてくれている。このボランティアは募集するが、近隣の外国人学校の学生・先生方等も来られ、英語で案内出来ることに学生は喜びを見い出している。1・2回生でこの仕事に携わった学生はその後他のボランティア活動にも興味を示すことが多くなっており、嬉しい傾向である。

以上のような情報を与えつつ、今年度の私の基礎英語セミナーではジョン万次郎についてのストーリーを読んだ。英語の読解力をつけるのが主目的であるが、同時に『10年間のアメリカ生活の後帰国、江戸幕府に開国を進言、明治維新に活躍した万次郎からあなたは何を学び、将来何をしたいか』の問いかけをしたかったからである。

簡単な時代背景を述べると万次郎は土佐清水生まれの漁師。1841年14歳の時出漁中に嵐に遭い無人島に漂着、アメリカの捕鯨船に助けられ渡米。フェアヘイブンに住むホイットフィールド船長の自宅に住み小学校からの教育を受けさせてもらう。船長の資格も取る。帰国した万次郎は幕臣として登用され開国すべきと進言。日米和親条約が締結され、250年の鎖国が終わる。大半の学生には、彼がどのような生活をしたかほとんど知られていなかった。

しかしさまざまな困難を乗り越え、自分の為、家族の為、日本の為に身の危険を冒してまでも行動したことを知ることによって、「探求心」と「たゆまぬ努力をする」生き方を学び取り、今後自分自身を大きく成長させてほしいと願っている。

日本における英語使用経験と英語教育

文学部 神戸国際教養学科

教授 吉岡 志津世

母語で不利益を被ることなく生活できる日本において、英語は第二言語ではなく外国語のひとつである。その英語教育が実用主義に大きく舵を切ったのは、2001年「21世紀日本の構想:日本のフロンティアは日本の中にある」を受けた『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』(2002) および『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』(2003)である。求められるのは「国際共通語」である英語によるコミュニケーションの力の育成であり、行動計画の中では、「日本国民に求められる英語力」として、「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」(中学卒業時点で英検2級、高校卒業で英検準2～2級、英語教員には英検準1級レベル)、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」と明記され、2011年からは小学校5・6年生に「外国語活動」(英語)が導入された。さらに2013年には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」がまとめられ、小学校中学年での外国語活動(英語)導入、高学年での英語教科化が謳われ、2014年11月には、中央教育審議会に対して学習指導要領の全面改定の諮問がなされている(2020年全面実施予定)。

英語教育に関する諮問内容は、「国際的な人材育成に向け、英語に親しむ「外国語活動」を小学3年から始め、5年から正式教科にする。「読む、書く、聞く、話す」の4技能育成が重要とし、「身近なことで気持ちを伝える」(小学校高学年)、「英語による授業を基本に、身近な話題で互いの考えを伝え合う」(中学校)、「幅広い話題で発表や討論」(高校)などの達成目標を設ける。」とのことである。高い目標である。

コミュニケーションの手段としての外国語習得では、学習者のニーズとモチベーション、そして実際にその言語を使用する機会・環境がなければならない。ここで、ベネッセ教育研究開発センターが2006年に実施した「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」を見てみよう。日本と韓国の高校生各4,000人を対象に、日常における英語の使用経験についてたずねたものである。調査結果によると、英語教科書以外の英語の本や英語の説明書、ホームページ、英字新聞など日常的に少しでも「読む」ことは、韓国58.2%～79.4%であったのに対し、日本ではわずか14.1%～32.0%、「英語での天気予報を聞く」は、韓国54.1%、日本8.6%、「テレビ・ラジオでの英語音声のニュースを聞く」は、韓国60.6%、日本27.3%、「話す」「書く」経験においても、「英語で道を尋ねられて答える(韓国76.7%、日本24.5%)」、「英語で日記を書く(韓国73.8%、日本22.5%)」と大きく差がある。10年前の調査でもあり、一概に比較はできないが、いずれにしても日本の高校生の英語を日常的に使用する頻度が低いことは明らかであろう。

教室を一步出れば母語の世界である。カナダにおける英・仏語のイマージョン教育の経験から、十分なコミュニケーション力を修得するには5,000時間が必要とのことである。教室での教授法の開発や指導体制の整備も不可欠であるが、同時に教室で学んだ英語を教室外でも日常的に定着させるための工夫も見逃すことはできないであろう。

いじめをなくす授業プログラムの開発

— 「いじめをなくす 10 段階」 —

文学部 教育学科
助教 谷山 優子

1 「いじめ防止対策推進法」

平成 23 年 10 月に大津市の中学 2 年生が、いじめを苦しんで自殺にいたった事件をきっかけに平成 25 年 6 月 28 日に「いじめ防止対策推進法の公布について（通知）」が文部科学省より出された。

これは、児童・生徒がけがをするなど重大ないじめが起きた場合、学校が事実関係を調査し、その内容を、いじめを受けた児童・生徒とその保護者、地方自治体に報告する義務を負うとするもので、公布から 3 カ月後の 9 月 28 日に施行された。

同法はいじめの定義を、対象にされた児童・生徒が「心身の苦痛を感じているもの」と規定。心身や財産に重い被害が生じた疑いがあったり、長期欠席を余儀なくされたりしているときを「重大事態」とし、インターネットを通じた攻撃も含むと明記している。

学校でのいじめ対策として、複数の教職員や心理、福祉の専門家で構成する組織を設けるとし、学校が犯罪として扱う必要があると判断したときは、警察署と連携して対処する。また、児童・生徒に重大な被害が及ぶ恐れがあるときは、直ちに警察署に通報し、援助を求めることというように義務付けている。

これまでの「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」とした 1985（昭和 60）年のいじめの定義が 2006（平成 18）年に「一定の人間関係にあるものから、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的苦痛を感じているもの」と変更されていたが、さらに踏み込んだ内容となっている。

このことは、文部科学省が平成 22 年 3 月に発行した「生徒指導提要」（文部科学省ホームページからダウンロードも可能）の中にも明記されており、いじめの構造や心理、早期発見・早期対応、予防についても教員が推進すべきことについて書かれている。

しかし、学校現場でこのような法律の内容を唱えていても、いじめをなくす具体的な方法にはつながらない。教職員の共通理解、チームで対応、地域や関係諸機関、専門家と連携というのは、学校組織の基本ではあるが、学級経営の基本ではない。まずは自分のクラスでいじめを起こさない、いじめの萌芽をつぶす、このことが学級担任にとっての重大な課題である。

そこで、「いじめをなくす授業」のプログラムを 3 つ考案してみた。教員を目指す学生たちが履修する「生徒指導論」の授業でこれらのプログラムに取り組みさせて効果を検証した。そのあらましを簡単であるが紹介したい。

2 「いじめをなくす」授業プログラム

<プログラム1> 「友だちって？」

道徳や特活などで、「友だち」の概念をとらえなおさせるプログラムである。質問事項に○や△や×を付けることで、いま自分が友だちと思っている子にされて嫌なことや、冗談のつもりでやっている行為や行動が、「いじめ」ととらえることができるのではないかということを、自分で判断できる。教師に「それはしてはいけない」と叱責されるより、自分で判断する機会をまず設けることが重要である。質問項目には、今、学級で気になる行為や行動、トラブルになっている行為や行動を入れていくとよい。

友だち○ どちらともいえない△ 友だちじゃない× をつけましょう。

- なかよく話す
- 一緒に外で遊ぶ
- 一緒に携帯型ゲームをする
- 遊ぶふりをしてぶつかる
- 遊ぶふりをしてたたく
- 呼ぶときに肩を強くたたく
- 無視をする
- おちよくなってくる
- おちよくなる
- 相談ができる
- 相談にのってあげる
- 素直に謝れる
- 謝れない
- 悪口を言われている
- 悪口を言う
- 何でもあげる
- 何でもくれる
- 借りたものを返さない
- お金のかしかりをする
- 素直にあやまれる
- はずかしいことをさせられる
- いけないことをしたらとめる

友だちって？

名前()

友だちなら ○ どちらともいえない △ 友だちじゃない ×

なかよく話す	悪口をいう
一緒に外で遊ぶ	悪口を書く
教室の中で遊ぶ	何でもくれる
一緒にゲームをする	無理やりくれる
無視をする	何でもあげる
遊ぶふりをしてぶつかる	助けてくれる
遊ぶふりをしてたたく	やきもちをやく
遊ぶふりをしてける	お金のかしかりをする
おちよくなってくる	はずかしいことをさせられる
仲間はずれにしてくる	いけないことをしたらとめる
相談ができる	相手の心配をする
相談にのってあげる	物をかくす
ケンカをする	冷たい態度をとってくる
素直にあやまれる	ごめんっていえない

資料1 「友だちって？」ワークシート例（筆者作成）

学生たちにもこのプログラムを実施した。はじめに、資料1のワークシートの空欄に、今の自分はどう考えるか鉛筆でチェックをつけさせた。次に、「中学生なら（小学○年生なら）どう考えるか想像して赤ペンでチェックしなさい」と指示をした。どの学生も、思春期を乗り越えた今と、思春期の子ども

とでは、「友だち」の定義が違っていると言いながらチェック作業を行っていた。それから、グループで、自分のつけたチェックと同じかどうかを討議させた。話し合いながら、子どもたちにとっての友だちは成長途上で、未熟であるということがわかったようである。各グループから話し合いの結果を発表させた。子どもの成長段階を理解した上で、本当の友だちはそういう行為や行動をしない（する）ものだという理解させることが大事であるという結論を全体での討議で導き出せていた。

学生たちは、このプログラムを体験し、友だち関係で悩む事の多い思春期の子どもたちにしっかり考えさせることができるので、教師になったらぜひ学級でこのプログラムに取り組みたいという感想を述べていた。

<プログラム2> 「けんかといじめのちがいは」

プログラム1で、一緒に遊んでいても、遊びでも「友だち」と言えない行動や行為があることに子どもたちが気づいたら、次は、よく起こる子どもたちのトラブルの質について考えさせることをしたい。教師も保護者に「A君は今日、友達にいじめられまして・・・」と「いじめ」という言葉を安易に使って連絡するようでは、「どんなことをされたのだろう」と保護者の不安をあおる。逆にいじめを見逃して「Aくんは今日もケンカをしていました」と「ケンカ」という言葉で伝えて、「いじめなのに軽く扱われている」と保護者の感情を逆なでするのも信用をなくす。何がケンカで、何がいじめなのかを子どもたちも教師も判断できることが重要である。まずは、子どもたちに投げかけて、考えさせるとよい。すると、以下のような意見が返ってくるだろう。

どうなのが「けんか」ですか

- ・1対1
- ・その場で仲直りしてすっきりすることもある
- ・正々堂々としている
- ・かっとなってはじまる
- ・あとですっきりすることもある

どうなのが「いじめ」ですか

- ・1対たくさん
- ・口先で仲直りしても恨みが残る
- ・ものを隠したり、こそこそしている
- ・いじめた方もいじめられたほうも嫌な気持ちがある
- ・気持ちが傷ついたまま
- ・作戦を練る、たくらむ、しつこい、卑怯



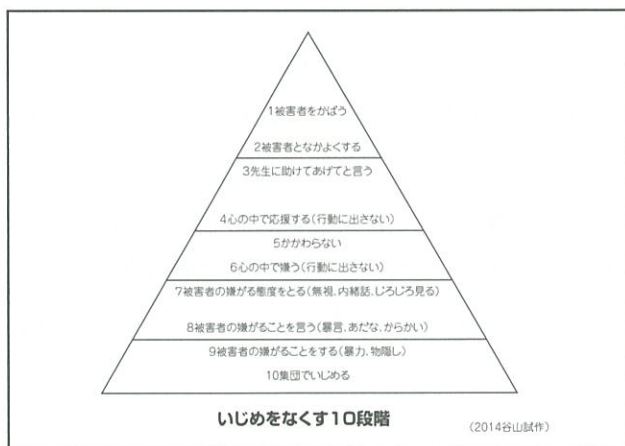
写真 グループで話し合う学生

子どもたちから出た意見を教師が以上のように分類し、板書していく。すると子どもは、どのような行為をケンカと呼び、どのような行為をいじめと呼ぶのが判別できるようになってくる。教師も、トラブルの際に、この表に照らし合わせて「みんなが考えた表で見えていくと、これはケンカですね。仲直りしたら成長できるね。」とプラスにとらえたり、「これはいじめになっている。絶対になくさないといけない行為です。」と行動に焦点を当てながら改善を促すことができる。例えば、子どもが「先生、靴がありません」と言いに来たら、担任としては本当に憂鬱になるが、靴隠しがケンカの腹いせなのか、陰湿な嫌がらせなのかで指導の仕方が異なる。行為の裏の感情に焦点を当てる指導をすることで、加害・被害の子どもの人間性を否定せず、行為や行動を改めないといけないのだという指導が可能になる。

<プログラム3> 「いじめをなくす10段階で成長しよう」

いじめの構造は「被害者」「加害者」「傍観者」「観衆」の4つであり、「仲裁者」が学級には必要であるという論調がある。実際、大学生にこの話をすると、「4つの構造を習いました」という。しかし、この構造を子どもたちに話して、「傍観者や観衆であることをやめましょう」「仲裁者になりましょう」と呼びかけていじめはなくなるだろうか。いじめを4つの構造でとらえるのではなく、細かなステップでとらえることを提案したい。

この行動は「いじめをなくす10段階」のどれ？



資料2 「いじめをなくす10段階」(筆者作成)



資料3 「いじめの段階を自覚する吹き出し」(筆者作成)

- 1 被害者をかばう
- 2 被害者となかよくする
- 3 先生に助けてあげてと言う
- 4 心の中で応援する (行動に出さない)
- 5 かかわらない
- 6 心の中で嫌う (行動に出さない)
- 7 被害者の嫌がる態度をとる (無視、内緒話、じろじろ見る)

- 8 被害者の嫌がることを言う（暴言、あだ名、からかい）
- 9 被害者の嫌がることをする（暴力、物隠し）
- 10 集団でいじめる

このように、いじめをなくすために起こす行動をスモールステップにしてみた。急に「いじめをやめなさい」と指導をしても、加害者も傍観者も観衆も行動を変える方法がわからないだろう。しかし、いじめの加害者も、口に出していじめていることを、被害者にかかわらないよう行動を変容できていれば、いじめをなくせる行動として改善できているということがこの表で確認できる。被害者をかばって助けることができない傍観者も、心の中で応援している段階から、先生に助けてあげてと言えれば、ステップアップできていると判断できる。個々の子どもが、自分の行動と照らし合わせて、より良い行動を取れるようスモールステップで示すことこそ効果があると考えられる。行動がステップアップできれば、自分が成長できていることが実感できる。そのためにも、自分がやっている行為や行動はいじめをなくすためのどの段階かを自覚させることが叱責よりも重要である。今、学級で気になる行動があるとする。たとえば、掃除中に、特定の子どもの机を運んだあと、手をほかの子どもに擦り付けるような行動を見たら、すぐその場で叱責した後、この表でバイキンあつかいという行為がどの段階にあるのかを全員に考えさせるとよい。

学生にこのプログラムを体験させるにあたって、バイキンあつかいについて問うと、「そういえば小学校の時にあったなあ」という程度の思い出し方であった。「やめときと言った」「自分のところでその連鎖を止めた」という者は35人の学生中1人（他の授業でも実施したところ、31人中1人、また186人中2人という結果）、大半は「自分もその『遊び』にのって、何も考えずにやっていた」ということを述べていた。その後、プログラムを次のように行った。まずは、資料2にある「いじめをなくす10段階」としたピラミッド型の表を1人に1枚ずつ配布する。次に、資料3の「いじめの段階を自覚する吹き出し」を配布し、ハサミで切り抜く作業をさせる。それから、各自で吹き出しの項目がどの段階に当たるかピラミッド型の表に置いていく。それができたら、判断つきかねるもの（吹き出しを動かしながら）も含めて、グループで話し合ってどの段階かを決めていく。

結果は、「バイキンあつかい」は、各自で6、7、8の段階であると判断していた。また、グループでも大体6、7、8ではあるが1つに定まらず、判断が人によって違い一致しないことに驚いていた。学校現場では、バイキンあつかいするような行為はいじめの萌芽である。いや、いじめの最もたちの悪いものの1つである。そこで筆者が「バイキンあつかいは10の段階になる」と学校現場で見られる実例と指導方法を話すと、学生たちは驚くと同時に納得し、「なすりつけられて私もほかの人になすりつけるふりを遊び感覚でやってしまって、ほんとうにひどいことをしていた」「教師はしっかりいじめの本質を見抜く目が大事」などといった感想を述べていた。「バイキンあつかい」以外にも「嫌なあだ名で呼ぶ」という行為も笑って済ます子どももいるが、深刻に受け止める子どもが多く、8や9や10の段階になる。このようなことを担任もしっかり判断しなければならない。まちがっても、学級の子もたちといっしょになって変なあだ名で呼んだりからかったりしてはならないことを肝に銘じておかなければならない。

3 いじめのない学級づくり

どの子ども安心して過ごせるということが学級づくりの土台である。いじめの早期発見・早期対応、組織的対応というのも大事であるが、まず、いじめを起こさない学級づくりに心血を注ぐことである。子どもたちの自尊感情が低くなっている今、いじめで優位に立ちたいとか、いじめですっきりしたいとかいうネガティブな動機で、いつでも、だれにでも起こりうる。学級で、できることが増えた、認められたという活動を通して、自尊感情をはぐくんでやりながら、いじめを認識する力をつけてやることが、将来にわたって必ず役に立つ力になると信じている。教員を目指す学生であっても、いじめを見抜ける力量形成として、この取り組みは効果があった。学生たちが、教育実習や現場に出たときにこれらのプログラムを実践してくれることを願いつつ、より現場に即したプログラムを開発していきたい。現場の先生方には、それぞれの学級の実態に応じてぜひとも取り組んでいただき、またご意見をいただきたい。

参考文献

- ・谷山優子「問題行動の早期発見」林尚示編著『新・教育課程シリーズ生徒指導・進路指導』一藝社,2014
- ・谷山優子「子どもの発達と生徒指導」同上
- ・松久眞実『あったか仲間づくり—いじめ撲滅！12か月—』明治図書,2014
- ・文部科学省ホームページ「いじめ防止対策推進法の公布について（通知）」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337219.htm（2015-1-23 確認）
- ・文部科学省『生徒指導提要』教育図書,平成22年

「栄養教諭」への思い

家政学部 管理栄養士養成課程

准教授 安田 敬子

平成 25 年 12 月。「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。その理由を簡単に述べると

1. 季節（旬）の食材を多用する
 2. 見た目が美しく、もてなしの心がある
 3. おせち料理をはじめとする行事食が多彩
 4. 栄養バランスが良い
- などです。

「寿司」や「天ぷら」といった固有のメニューではなく、和食全体の食文化が世界に認められたのです。でも、今の私たちはこれらを次世代に継承していける食生活を実践しているのでしょうか？

「食育」という言葉は、10 年ほど前から盛んに使われるようになりましたが、すでに明治の中頃に、石塚左玄、村井弦斎によって「小児には徳育よりも、智育よりも、躰育よりも、食育が先き。躰育、徳育の根元も食育にある。」と紹介されています。が、その後「食育」は消え去り、時代は低栄養から飽食へ、感染症から生活習慣病へと大きく変化し、課題が山積している状態で今に至っています。

このような中、平成 17 年に「食育基本法」が策定され、同時に「栄養教諭制度」もスタートしました。栄養教諭は栄養士もしくは管理栄養士であると同時に教師でもあり、これまでの学校栄養職員の職務に「食に関する指導」が加わりました。子どもたちには朝食欠食、肥満ややせ、食物アレルギー、偏食等、様々な食に関する課題があり、生きた教材である給食を使った指導をはじめ、チームティーチングや、個別栄養指導などの方法で、子どもたちに、そして子どもたちを通して保護者に対しても課題克服のための指導が期待されています。

管理栄養士養成課程は学科独自の必修科目数が多く、臨地実習もあって大変な学科ですが、教職課程を選択した学生は意欲的に学習に励みます。しかし、教育実習を経験するまでは、取得できるのなら取っておこうという軽い気持ちも垣間見えます。その中で、教育実習を経験した学生の変化には驚くべきものがあります。教育実習の効果と言ってしまうえばそれまでですが、子どもたちの持つ力の素晴らしさを実感する瞬間です。そして教師の、子どもたちへの影響力の大きさに驚き、より真剣に取り組むようになります。ここで、単に免許資格を取るだけから、栄養教諭になりたいと思う学生が増えるように思います。

残念ながら、栄養教諭は各学校に必置ではありません。しかし、徳育、知育、体育の基礎となる食育は大変重要で、次代を担う子どもたちが「正しい食の選択能力」を身に付けて生涯をできるだけ健康に過ごし、日本の食文化を継承していくためには栄養教諭の地道な努力があってこそです。「栄養教諭制度」スタートから 10 年、20 年先、30 年先に素晴らしい成果が見られるよう、栄養教諭として頑張りたいと思います。